

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件①) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

全長約 13 cm。体重 10～16 g。頭部からの上面は灰褐色。喉からの下面は汚白色で、胸と脇は淡灰褐色。胸から脇の暗色の斑紋が不明瞭であり、この点で類似するサメビタキやエゾビタキと区別できる。眼が大きく、白いアイリングは太い。眼先に広い白色部がある。黒い嘴は長めで、下嘴基部は橙黄色。とまり木から飛び立ち、羽虫を捕えてまた元の枝に戻るフライングキャッチを行う。夏鳥（対象：繁殖地）。

2. 分布

国外ではバイカル湖周辺からアムール・ウスリー、中国東北部、サハリンと、これらの地域から離れたインド・ヒマラヤで繁殖し、インドから中国南部・東南アジアで越冬する。国内では九州以北に夏鳥として渡来し繁殖する。県内では伊豆半島をのぞく全域で記録があるが多くない。確実な繁殖の記録は富士山麓、愛鷹山以外ではきわめて少ない。

3. 生息環境

平地から標高 1,600 m くらいまでの低山の落葉広葉樹林に生息する。密生した林よりも比較的樹高が高く、中層が開けた明るい林を好む。富士山麓では標高 1,600 m 以上に生息するサメビタキと標高の違いで棲み分けをしていると思われる。

4. 生息状況

1997 年以前には龍山村、佐久間町、静岡市井川、富士山周辺で繁殖期の記録があった。富士山麓では繁殖期に標高 600 m から 1,600 m の落葉広葉樹林で毎年観察されているが、徐々に減少傾向にある。一方、平地での繁殖記録は殆どない（2017 年浜松市天竜区での繁殖記録あり、標高 150 m）。

5. 減少の主要因と脅威

平地での減少は、宅地開発など人間の行動圏の拡大により生息地である落葉広葉樹林が失われた（11）ことが原因と思われる。しかし、森林が残されていても個体数が減少している所がある。その原因は不明であるが、越冬地や渡り中継地の環境悪化（54）の可能性もある。

6. 保護対策

富士山麓では現在繁殖が確認されている 1,600 m 以下の落葉広葉樹林を保全する必要がある。また、平地での繁殖を把握するための調査を行うことも必要であろう。

7. 特記事項

特になし。

8. 主な文献

高野伸二（1991）野鳥識別ハンドブック．日本野鳥の会，東京，327 pp.

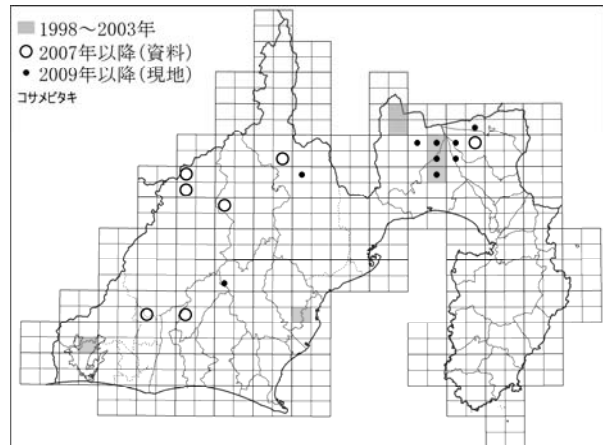
中村登流（1997）コサメビタキ．樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲 編，日本動物大百科 第 4 巻 鳥類Ⅱ，p. 125. 平凡社，東京．

影山秀雄（2004）コサメビタキ．静岡県自然環境調査委員会 編，まもりたい静岡県の野生生物-県版レッドデータブック-（動物編），p. 95. 羽衣出版，静岡．

（渡邊修治）



©2019 S.Watanabe
富士市大淵 2009年5月27日 渡邊修治



1. 種の解説

全長約 15 cm。オスの夏羽は頭部と喉が黒色、後頭から胸横は赤褐色、胸と腹は淡灰褐色、背は赤茶色で黒い縦斑がある。メスは眉斑と頬線、喉は白っぽい。背面はオスに似ている。オスの冬羽はメスに似ている。餌として夏期には昆虫類やクモ類を主とし、冬期は種々の雑草の種子を主とする。冬鳥（対象：越冬地）。

2. 分布

国外では中国東北地方、ウスリー地方、朝鮮半島で繁殖し、中国東部で越冬する。国内では本州北・中部及び九州の阿蘇地方で繁殖し、関東以西、四国、九州などで越冬する。県内では東部の沼津市の湿地、西部の磐田市の草原で渡り期に比較的安定した生息が確認されている。

3. 生息環境

河川敷や湖沼周辺、耕作地縁辺、休耕田などの草地及びヨシ原に生息する。ただし、越冬期には単純なヨシ原ではなく、丈の高くないイネ科植物の繁った草原の方が餌となる草の実が多いので好まれる。

4. 生息状況

上記沼津市の湿地帯では毎年秋の渡り期に 20 羽前後が標識放鳥されており（渡邊修治氏私信）、西部の磐田市の同調査では最多年で 7 羽であった（北川）。西部の遠州平野は、越冬期の生息場所として広大な面積であり、実際にはさらに多くの生息数が推測され、今後調査が求められる。なお、伊豆及び中部地域は好適環境が少ないために記録例も少ない。

5. 減少の主要因と脅威

湿地の埋立て（15-1）、河川敷などにおける河川開発（13）、植生遷移（54）、圃場整備による縁辺の草地の減少（15-2）。

6. 保護対策

経済的には生産性がないと考えられているヨシ原、湿地、耕作地縁辺の草むらなどへの価値の啓発。

7. 特記事項

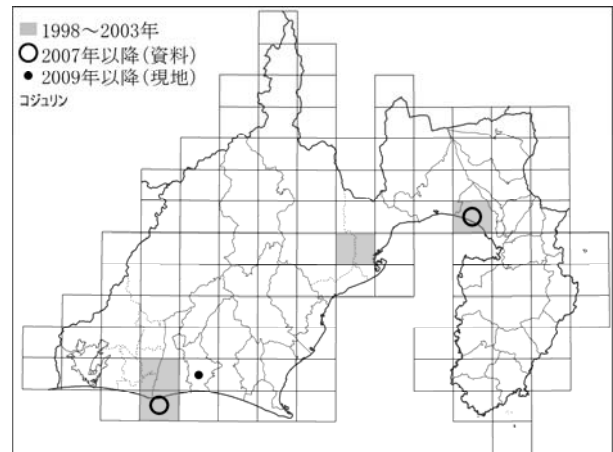
かつて、現富士宮市を含む標高 850 m～1,115 m の富士山麓の高標高の草原で繁殖が記録された（清棲, 1978）が、それらの個体群は現在すべて消失している。繁殖地と越冬地である本県との関係は次のとおりである。2011 年 10 月 21 日に繁殖地の青森県三沢市仏沼で標識放鳥した個体が 38 日後に 650 km 離れた磐田市の回収放鳥された（北川）。青森の繁殖地からの飛来はこのほかに沼津の 2 例（神谷）がある。また、2009 年冬に浜松市北区で標識放鳥した個体（武田由紀夫氏私信）が 2010 年繁殖地の新潟県新発田市で回収放鳥された（千葉）ことと 2016 年繁殖地の秋田県大湯村で標識放鳥した（杉野目）個体を 2017 年磐田市の回収放鳥した（北川）例は、ともに太平洋側の越冬地と日本海側の繁殖地との往来を示したものである。

8. 主な文献

- 永田尚志（2014）チュウヒ．環境省 編，レッドデータブック 2014 2 鳥類：220-221
- 清棲幸保（1978）コジュリン．増補改訂版 日本鳥類大図鑑 I，pp. 32-33．講談社，東京．
- 財団法人 山階鳥類研究所（2002）53 コジュリン．渡り鳥アトラス 鳥類回収記録解析報告書，p. 102．同研究所，我孫子市．



沼津市原 2000年1月14日 渡邊修治



1. 種の解説

オスは全長約 125 cm、このうち尾は長く 90 cm にもなる。全体に赤味の強い褐色で、眼の周りの皮膚が裸出し顔が赤く見える。メスは全長約 55 cm で尾は短い。声はほとんど出さず、繁殖期のオスは翼を羽ばたいて「ドドド・・・」と言う音を出す。地上で種子、漿果、ミミズ、昆虫類などを食う。留鳥（対象：生息地）。

2. 分布

日本特産種で、本州、四国、九州に留鳥として分布し、5 亜種が生息する。県内では伊豆半島に亜種ウスアカヤマドリ *S. s. subrufus*、他地域に亜種ヤマドリ *S. s. scintillans* が生息すると言われているが、近年その分布域が明確ではない可能性がある。

3. 生息環境

山地の落葉広葉樹林、スギ、ヒノキなどの植林地、針広混交林の薄暗い林中に生息する。林の草むらや木の根元を浅く掘り、簡単な巣を作って繁殖する。

4. 生息状況

県内では西部と伊豆の山間地に記録が多い。生息環境が薄暗い森林で、地上での生活が多いことから、その存在を目にする機会は少ない。

5. 減少の主要因と脅威

山間地のスギ・ヒノキ植林地の管理放棄による生息環境の悪化 (53) と狩猟鳥としての重圧 (41) が危惧される。また、放鳥事業が生息分布における亜種・個体群間の交雑をもたらすおそれがある (57-1)。

6. 保護対策

スギ、ヒノキの人工林を適正管理することにより、下層植生の生育を促し本種の生息環境を維持することと、狩猟鳥から除外することが必要である。

7. 特記事項

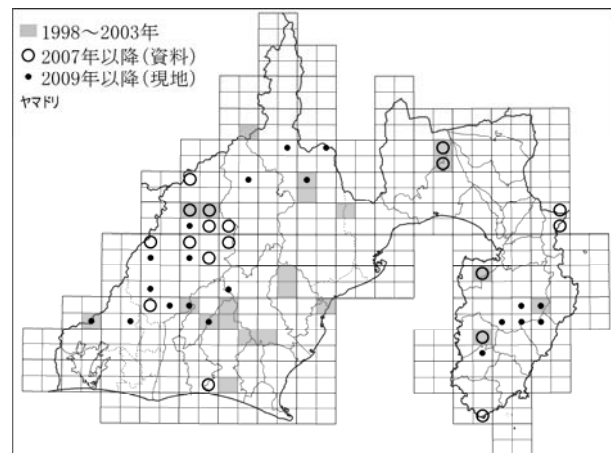
ヤマドリの亜種による羽色の変化は、気温と湿度に関係する (山階, 1926)。伊豆半島の亜種ウスアカヤマドリは天城山系の南北でも変異があるという。

8. 主な文献

- 北川捷康 (2018) 県版 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29
 黒田長久・盛岡弘之 監修 (1987) 分類と飼育 キジ目. 世界の動物, p. 113. 東京動物園協会, 東京.
 山階芳麿 (1926) 伊豆半島に於けるヤマドリ類 (*Graphophasianus soemmerringii*) の羽色其の他の地方的変異に就いて. 動物学雑誌 38(452) : 157-162



周智郡森町 1999年5月9日 北川捷康



(酒井洋平)

シノリガモ *Histrionicus histrionicus* (Linnaeus, 1758)

カモ科 Anatidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)
(静岡県該当なし)]

1. 種の解説

全長約 43 cm。オスの体は青味がかった黒と橙色に複雑な模様の白斑が散在する。メスは顔に白斑があるが、全体が黒褐色である。冬鳥として渡来する。岩礁帯で、貝、カニ、海藻などを食う。河川に入る例は少ないが、カワゲラなどの水生昆虫を捕食する。冬鳥 (対象: 越冬地)。

2. 分布

国外ではグリーンランド、バイカル湖から東シベリア、アラスカなどで繁殖し、アリューシャン列島、北アメリカ沿岸などで越冬する。国内では冬鳥として北海道、本州に分布するが、中部以南には少ない。東北、北海道の山地溪流で、少数が繁殖する。県内では岩礁の多い伊豆の海岸や、御前崎海岸などに渡来する。

3. 生息環境

外洋に面した波打つ磯や、岩礁のある海岸を好んで生息するが、消波ブロックなどを利用することもある。

4. 生息状況

県内では12月から4月頃まで、荒磯の海岸などで越冬する。岩礁のある海岸を好むため、長い海岸線を有する県内でも、渡来地に限られる。かつて10羽ほど越冬していた御前崎海岸では1996年に9羽(北川)、2016年には1羽(小粥)と減少している。伊豆では海岸、河口部で少数がみられている。変わったところでは、2009年11月に富士川中流の富士市大北での観察例(影山)及び2010年12月に浜名湖の岩場の多い礫島で6羽の観察例(北川)がある。

5. 減少の主要因と脅威

渡来数の減少は、越冬地となる海岸や港湾、河口などの改変に伴うこと(13、14)が多い。過去に毎年渡来が見られた御前崎海岸は港湾施設の改変後は減少が著しい。

6. 保護対策

越冬地として必要な港湾、岩礁の環境維持と保全が望まれる。

7. 特記事項

特になし。

8. 主な文献

清棲幸保 (1978) シノリガモ. 増補改訂版 日本鳥類大図鑑 II, pp. 416-417. 講談社, 東京.

黒田長久・盛岡弘之 監修 (1980) 分類と飼育 (ガンカモ目). 世界の動物, p. 78. 東京動物園協会, 東京.

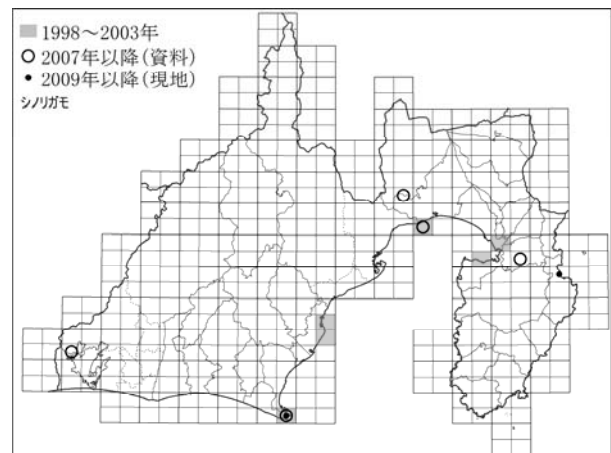
日本鳥学会 編 (2012) 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 兵庫, 438 pp.

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, 41: 25-29

(酒井洋平)



©2019 K.Kitagawa
御前崎市 御前崎海岸 1996年1月20日 北川捷康



1. 種の解説

全長約 42 cm。オス成鳥は背が黒いほかはほぼ全身が白く、黒い線条が幾本か走る。嘴の基部から目を囲む大きな黒斑はパンダに似た趣きを持つ。メスは頭部の栗色と前頸の白が目立つが、その他の部分は灰褐色をしている。渡来直後のオスのエクリップス個体はメスと同じ羽色をしているが、次第に換羽していく。メスに求愛する時のオスは前頭部の羽毛を立てる。カモの仲間では珍しく、水中にもぐって小魚などを捕食するアイサの仲間属する。冬鳥として少数が渡来する。冬鳥 (対象: 越冬地)。

2. 分布

国外ではスカンジナビアからユーラシア大陸の亜寒帯一帯で繁殖し、中部ヨーロッパ、黒海、カスピ海、中国、韓国などで越冬する。国内では北海道 (一部繁殖)、本州、四国、九州に分布する。県内では西部には毎冬定期的に渡来するが、東・中部ではきわめて少ない。

3. 生息環境

湖沼、河口、現・旧養魚池などに生息する。

4. 生息状況

1980年代までは浜松市の佐鳴湖に多数渡来し、多い時には 50~90 羽生息していたが、現在越冬するものは数羽程度に減少してしまい、西部の各地に分散する傾向がみられた。2000年代に入ってから 10 羽程度が越冬するのは天竜川 1ヶ所になりその状態がしばらく続いたが、現在では細江、舞阪、磐田市大池などさらに少数分散化傾向が強まっている。

5. 減少の主要因と脅威

全体数の減少及び少数分散化傾向の要因は、水質の悪化 (31)、レジャー圧の増加 (71) が考えられるが、はっきりしない。

6. 保護対策

要因が特定できないため、有効と思われる対策は挙げられない状況である。

7. 特記事項

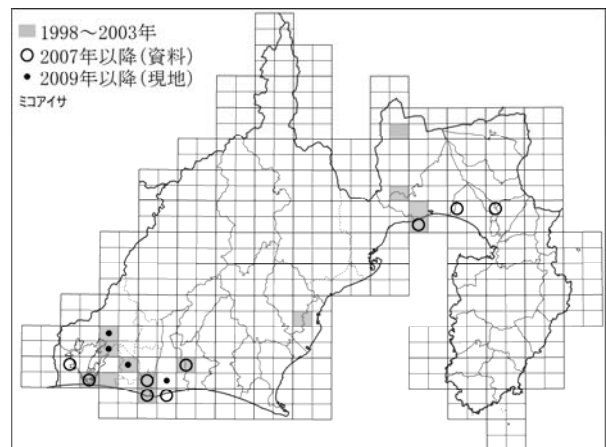
日本に渡来し初めの時期の 11 月上~中旬に集結が見られる北海道の濤沸湖では、2009~2017 年の間に最少は 2014 年の 320 羽、最多は 2017 年の 1,633 羽が見られたという (渡辺義昭氏私信)。

8. 主な文献

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29



浜松市 佐鳴湖 1986年2月7日 北川捷康



(北川捷康)

1. 種の解説

全長約 29 cm。雌雄同色。額から尾羽までの上面が茶褐色で、黒い縦斑がある。顔から胸までは青灰色で黒い過眼線がある。下腹部は白黒の横斑がある。湿地環境で昆虫類、甲殻類、軟体動物、魚類や植物の種子などを餌にする。冬鳥（対象：越冬地）。

2. 分布

国外ではヨーロッパや中央アジア、シベリア南部、モンゴル、中国東北地域などで繁殖し、冬期には南へ移動して越冬する。国内では北海道、南千島、本州、佐渡、舩倉島、隠岐、見島、四国、九州、対馬、伊豆諸島、トカラ列島、奄美諸島、琉球諸島、に生息する。県内では冬鳥として湿地の多い西部地域に集中して生息し、湿地の少ない

他の地域では少ない。

3. 生息環境

平地の水田や湿地、湖沼・河畔のヨシ原、谷戸環境の湿地などに生息する。

4. 生息状況

浜名湖周辺域の湿地環境での確認例は比較的安定しているように感じられる。ただし、本種は湿地環境への依存度が高いため、皮肉にも生息環境の減少に伴い、残された湿地への集中・避難することにより観察頻度が増している可能性もある。

5. 減少の主要因と脅威

遷移進行による湿地の乾燥化 (54)、湖沼岸辺の改修工事などによる湿地消滅「湿地開発 (15-1)」。また、残された生息環境では、観察頻度増とともに轢死個体、他の動物による捕食残骸 (羽) の記録も報告され、本種と同様の環境を好む外敵となる捕食動物の侵入が危惧される (52-3、52-4)。河畔ヨシ原では、増水時における漂流物 (ペットボトル・発泡スチロールなどの石油製品) の堆積による餌場消失 (71) も脅威である。

6. 保護対策

乾田化防止、湿地・湖沼・河畔のヨシ原保全、谷戸環境の湿地保全が望まれる。

7. 特記事項

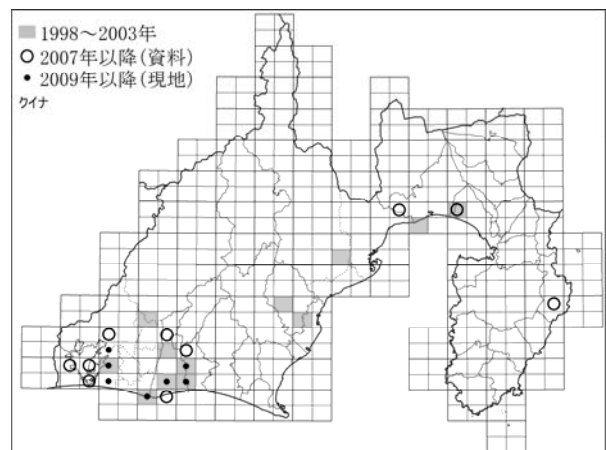
特になし。

8. 主な文献

基本的な事項については、分類群の解説 (p72) の引用文献に挙げたものを利用した。



磐田市鎌田 1991年4月30日 北川捷康



(森田剛則)

タゲリ *Vanellus vanellus* (Linnaeus, 1758)

チドリ科 Charadriidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

全長約 32 cm。雌雄ほぼ同色。冬羽は頭が黒褐色で、後頭に長い冠羽がある。体上面は緑色光沢があり、赤紫色の光沢が混じる。尾羽の先半分は黒く、基部は白い。胸には黒い帯がある。飛び立つ時には「ミュー」と特徴的な声を出す。水田、畑、湿地などで水生昆虫類やミミズなどを採餌する。冬鳥（対象：越冬地）。

2. 分布

国外ではヨーロッパや中央アジア、シベリア南部、モンゴル、中国東北地方などで繁殖し、冬期には南へ移動して越冬する。国内では北海道(旅鳥)、本州、四国、九州、琉球諸島など全国に渡来する。本州中・北部地方では繁殖記録がある。県内では冬鳥として主に西部に広く分布する。

3. 生息環境

開けた水田の刈跡や耕作地、草地などに群れで生息する。

4. 生息状況

東部で 4 メッシュ、西部では 14 メッシュが記録され、静岡県レッドデータブック (2004) と同様の西部に偏った分布状況である。個体数においては、2009 年 11 月磐田市 50 羽 (北川捷康氏私信)、2011 年 11 月富士市 40 羽 (渡邊修治氏私信) の大きな群れが確認されているが、以後は少数の観察のみである。減少傾向にあるともとれるが年による渡来数の変化が大きい傾向があるので正確な判断は難しい。

5. 減少の主要因と脅威

水田からの転作による開けた環境の消滅 (15-2)、耕作放棄田畑の管理放棄に伴う草地化 (53) などにより、生息環境の消滅が危惧される。具体的な減少の状況については不明である。

6. 保護対策

平地の水田、畑、草地、磐田市大池の干潟などの開けた環境の保全が望まれる。

7. 特記事項

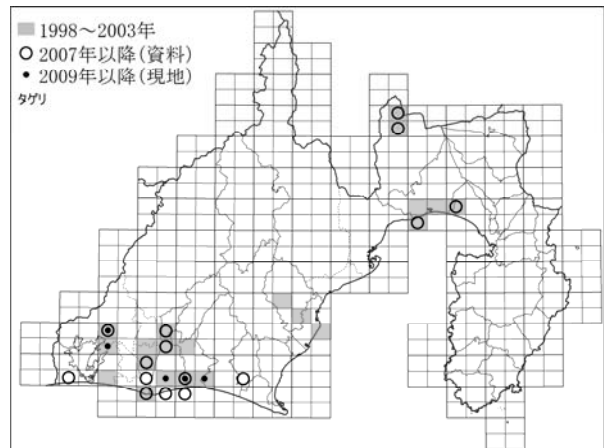
特になし。

8. 主な文献

基本的な事項については、分類群の解説 (p72) の引用文献に挙げたものを利用した。



磐田市 1990年2月13日 北川捷康



(森田剛則)

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) : 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

全長約 21 cm。雌雄ほぼ同色。額が白く、前頭は黒い。背面は灰褐色で下面は白い。コチドリに似るが大きく、目を囲むリングの色が不鮮明であること、飛翔時の翼上面に淡色帯が出ること、動きがゆったりしていることなどで区別できる。繁殖期は他のチドリ類より早く始まり、3～7月である。繁殖中に擬傷行動を行う。留鳥（対象：生息地）。

2. 分布

国外では中国北東部、ウスリー地方、朝鮮半島などで繁殖する。国内では北海道、本州、四国、九州に分布し、本州北部以北のものは冬季南へ移動する。県内では全域の砂利河川に分布し、大河川では上流まで分布する。

3. 生息環境

主に砂礫の河川敷や中州のある環境に生息・繁殖するが、稀に広い埋立地で繁殖することもある。繁殖期以外には湖沼畔や水田に生息することもあるが、干潟や海岸に出ることは稀である。

4. 生息状況

主な営巣場所である河川の河川敷及び中州の砂礫地は、植生遷移により営巣適地が極端に狭められており、残された裸地はオフロード車の通行や野外活動の影響を受けている。植生遷移の影響のない低い砂礫地は少しまとまった雨が降ればすぐに冠水被害を受ける、といった具合に繁殖を取り巻く環境は阻害要因が多い。繁殖中はつがいごとに縄張りを構えて集団化しないが、繁殖期終了とともに7月のうちに小群をつくる傾向がある。太田川では数羽～10羽ほど、天竜川では数羽～20羽ほどになり、その後やや数を増やして越冬群になる。天竜川では静岡県レッドデータブック

(2004) 時には30羽を超える越冬群がいたが、現在は20羽を超えるものは稀である。一方、河口から10数kmまで前記2河川よりも砂利の裸地がはるかに広い安倍川や大井川では、繁殖後に大きな群れを見ない(北川)。なお、繁殖期に大井川上流部の畑薙第一ダム～榎島まで3メッシュの生息を確認している。

5. 減少の主要因と脅威

主な繁殖場所である河川の砂利の裸地では植生遷移(54)が進み、天竜川や大井川では中州までヤナギの林になっているところも多くなっている。狭められた裸地はオフロード車の通行で卵やヒナが轆かれる被害に遭い(51)、気象においてもゲリラ的な集中雨に見舞われることが多くなり、冠水被害による卵やヒナの流失という繁殖の阻害(55)も増加している。

6. 保護対策

特に有効な対策は挙げられないが、河川管理計画に減少の主要因を排除する対策を求めたい。

7. 特記事項

全国的には主に河川の中流以上に生息するとされるが、東海型の砂利河川が多い静岡県では河口まで低水路や中州が砂利であるため、海岸からわずかに数100mあたりで生息繁殖する。ただし、天竜川だけは砂利採取過多による河床の低下と植生遷移のため、河口から3km以上でないとは繁殖できない。

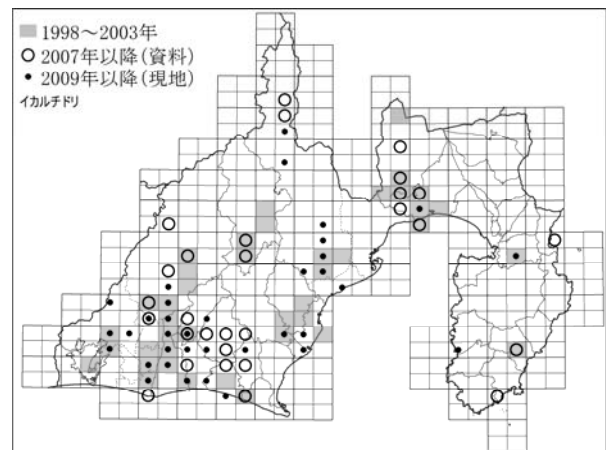
8. 主な文献

北川捷康(2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

北川捷康(1998) 浜北市の野鳥. 浜北市教育委員会, 浜北市, 18 pp.



©2019 K. Kitagawa
浜北区天竜川 2003年6月3日 北川捷康



(北川捷康)

セイタカシギ *Himantopus himantopus* (Linnaeus, 1758)

セイタカシギ科 Recurvirostridae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)]

1. 種の解説

全長 35~40 cm。喉から体の下面は白く、黒い上面とのコントラストをはっきりしている。頭部から後頸、上面の黒さは雌雄、成・幼鳥により異なる。オス成長夏羽の上面は黒に緑色光沢がある。頭部から後頸は黒いものから白いものまで個体差がある。メスや若鳥の上面は褐色をしている。桃赤色の長い脚と細長い針のような黒い嘴も特徴で、長い脚を生かして他のシギ類よりも深い場所で採餌できる利点がある。餌は小さなカエル、オタマジャクシ、小魚、ゲンゴロウ類、小貝などである。旅鳥、一部夏鳥・冬鳥 (対象: 生息地)。

2. 分布

国外ではユーラシア大陸南部、アフリカ、南北アメリカ、オーストラリアなどに広く分布。国内では北海道、本州、四国、九州に、主に春秋に旅鳥として渡来する。千葉県、東京都、愛知県、静岡県などで繁殖記録がある。県内では内陸湿地に局地的に分布する。

3. 生息環境

主として休耕田や池沼畔などの内陸湿地に生息する。かつては稲刈り取り後の水田が良い生息場所になっていたが、圃場整備後の乾田化が進み、それまで見られなかった河川、河口部へも一時的に姿を見せるようになった。

4. 生息状況

県内では内陸湿地が少なく、生息適地はもともと限られていた。観察されるのは1~数羽であることが多い。2001年浜名湖畔の埋立地において県内唯一の繁殖記録があったが、その後造成が進み消滅した。目にする機会はやや増えたと言われるが、湿地の減少に伴い限られた場所に集中するようになったことと観察者の増加によることも考えられる。磐田市大池、浅羽町休耕田、浮島ヶ原などの湿地に局地的に生息する。多数記録としては2003年に袋井市浅羽で16羽観察した (北川)。ふつうは1羽であることが多いが、磐田市大池では毎年複数個体が生息し、越冬するものもいる。

5. 減少の主要因と脅威

湿地の造成 (15-1)、圃場整備による耕作期以外の乾田化 (15-2) などの影響が大きい。

6. 保護対策

稲刈り取り後の冬水田んぼの活動に期待したい。

7. 特記事項

国内で亜種オーストラリアセイタカシギ *H. h. leucocephalus* が少数記録されている。県内ではまだ記録はないが、将来記録される可能性がある。しかし、環境省ではレッドリスト対象外としている。

8. 主な文献

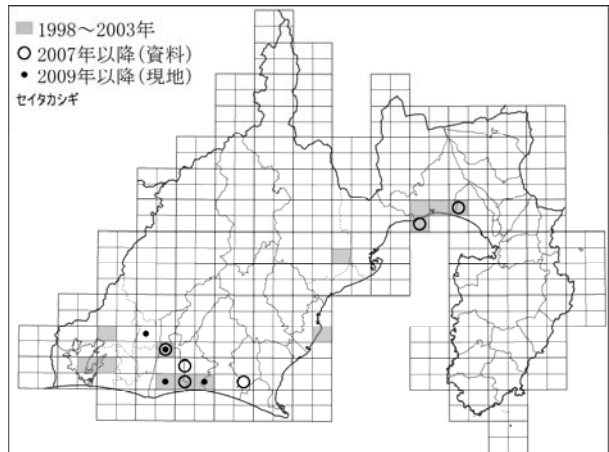
高野伸二 編 (1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥, 山と溪谷社, 東京, 591 pp.

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

(北川捷康)



磐田市竜洋 1997年5月6日 北川捷康



1. 種の解説

全長約 19 cm。雌雄同色。冬羽は下面が白く上面が灰白色で、シギ・チドリ類の中で最も白く見える。渡去前の 5 月には頭、胸、背が赤褐色になる。旅鳥として春秋に通過するものと越冬するものがある。海岸の砂浜の波打ち際で、寄せては返す波に合わせて群でスピーディーに進退し、波が運んできた餌を採る様子は特徴的である。餌は主に小さな甲殻類、貝類、多毛類などである。旅鳥・冬鳥（対象：生息地）。

2. 分布

国外ではシベリア中部と北アメリカの北極海沿岸の一部で繁殖し、非繁殖期は温帯から南半球全域の沿岸部に飛来する。国内では北海道、本州、四国、九州に旅鳥として渡来し、関東以西では越冬するものがある。県内の分布は伊豆・東部・中部では稀で、主に西部に生息する。

3. 生息環境

砂浜の海岸、干潟、河口などに生息するが、砂浜の海岸を最も好む。内陸部の湿地に入ることにはめったにない。

4. 生息状況

主に外海の波が打ち寄せる遠州灘の砂浜の海岸が生息適地であるため、東部・中部地域では少なく、伊豆地域では記録されていない。西部地域では遠州灘海岸で数羽から時に数十羽の越冬群が見られるが、2004 年には馬込川河口～天竜川河口間で 48 羽が生息、2015 年には御前崎で 84 羽、2016 年の太田川河口では 7 羽が観察されている。

5. 減少の主要因と脅威

主な生息場所である遠州灘海岸の砂浜は、中田島海岸を初めとして全域で縮小 (25) している。当然のこととして餌の供給量が減る。また、現在では真冬でもサーフィン、ウインドサーフィン、釣りなど四駆車往來のレジャー圧が強まり、採餌場、休息場所は縮小し、安息も阻害されている (71) 現状がある。最近世界で心配されているのがマイクロプラスチック (マイクロビーズ) と呼ばれる 5 mm 以下のプラスチック片の拡散である。海に流された膨大なプラスチックが波と紫外線などの影響で細分化され、海岸に打ち寄せられたこれらを甲殻類の幼生や魚卵と間違えて飲込むと消化管などの閉塞、プラスチック成分の浸出と濃縮などの被害、不消化物をペレットとしてまとめて吐き出す習性があるシギ類でも、消化吸収されないものの満腹感に騙されて餌の摂取量が減るなど々の被害 (71) が懸念されている。

6. 保護対策

海岸管理計画に減少の主要因を排除する対策を求めたい。

7. 特記事項

特になし。

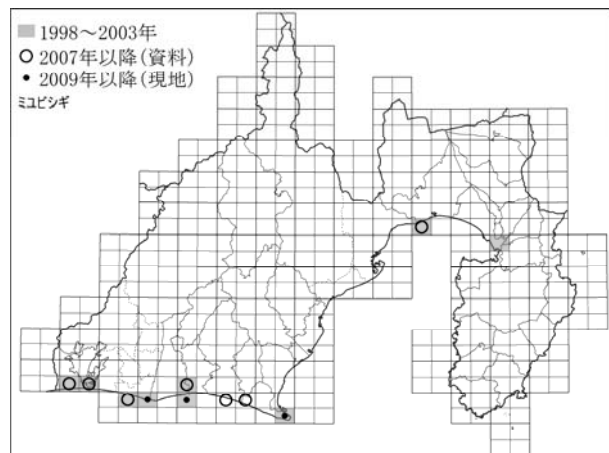
8. 主な文献

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

(北川捷康)



遠州灘海岸 1996年5月4日 北川捷康



オオタカ *Accipiter gentilis* (Linnaeus, 1758)

タカ科 Accipitridae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更コード 17

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

1. 種の解説

中型の猛禽類で全長オス約 50 cm、メス約 56 cm。翼開長 106~131 cm。成鳥は頭部から背面、尾の上面が青灰色で、下面は白っぽい。胸から腹にかけては白地に細かな横縞があり、尾には黒い横帯が 3~4 本ある。幼鳥は上面が褐色、下面は淡黄褐色で、胸から腹にかけて褐色の縦斑がある。森林性のタカであり、主に林内や林縁部で狩りをする。餌は主に小~中型の鳥類で、ハト類が多い。留鳥 (対象: 生息地)。

2. 分布

国外ではユーラシア及び北アメリカ大陸の北部に、国内では北海道から九州に広く分布する。繁殖は近畿以北で確認されている。留鳥だが幼鳥は分散のため移動する。冬季には南下する個体もあると考えられる。県内では西部から伊豆にかけて広く分布する。

3. 生息環境

平野部から低山の里山環境が生息適地だが、海岸林や山間地に生息するものもある。採餌環境としては林内や林縁部のほか、林縁に近い農地や、灌木が点在する河川敷などの開放的な環境も利用する。

営巣地では樹齢が高く林内に十分な飛翔空間がある林の大径木に架巢することが多いが、比較的密な林の林縁近くに架巢することもある。

4. 生息状況

1998年に調査した営巣地 46ヶ所のうち 20ヶ所を 2015年に再調査したが、それらすべてで繁殖が確認されなかった。繁殖数は、静岡空港調査では平成 10~21年と平成 21~25年の比較で約 4割減、掛川市自然環境調査では平成 17と 26年の比較で約 4割減と報告がある。最近約 10年の傾向は、山間地の繁殖記録がほぼなくなり、里山及び市街地周辺が主な生息地である。

5. 減少の主要因と脅威

生息条件として餌動物の生息密度と採餌環境があげられる。近年、道路建設 (24)、宅地開発 (23)、農地開発 (15-2) などによる直接的あるいは間接的影響で一部の生息地が消失している。種間関係では、クマタカが捕食者脅威 (52-4) に、ノスリは餌場と営巣地の競合相手 (56-2) になっている可能性がある。

6. 保護対策

耕作地や植林の管理放棄に伴い、重要な林縁の採餌環境は悪化する。森林及び耕作地周辺に広く手を入れて管理する行為が、最も有効な保護対策になると考えられる。静岡空港では営巣林はある程度保全されたものの繁殖数は減少したことから、採餌環境の保全が課題であると言える。

7. 特記事項

種の保存法の国内希少野生動植物種解除 (平成 29年 9月)。1980年以前は情報がきわめて少なかったが 1980年頃を境に目撃情報や繁殖情報がしだいに増加した経緯がある。実際の生息数も 1980年頃から 2000年頃にかけては増加傾向にあったと考えられるが、その後は減少している可能性がある。

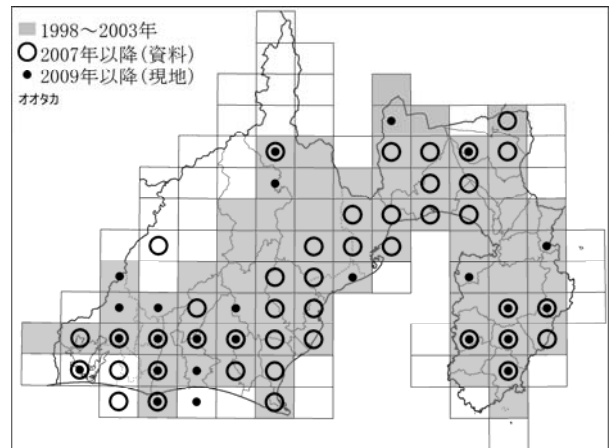
8. 主な文献

静岡県文化・観光部空港振興局空港運営課・静岡県静岡空港管理事務所・常葉学園 富士常葉大学・自然環境巡視連絡会 (2016) 富士山静岡空港自然誌-人と自然にやさしい空港をめざして-。静岡県, 静岡, 353 pp.

(新井 真・近藤多美子)



富士市神谷浮島ヶ原 2005年 3月 5日 渡邊修治



静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

全長 50 cm で頭が大きく顔盤の発達した大型の猛禽類。雌雄同色。頭部から体上面は灰褐色で、黒褐色の斑がある。胸から下の体下面は淡灰褐色で黒褐色の縦斑がある。灰褐色をした顔は、正面から見ると特徴的なハート形の淡灰褐色をした縁取りがある。夜行性で、餌はネズミ類が主であるが鳥類も捕食する。留鳥 (対象: 生息地)。

2. 分布

国外ではユーラシア大陸の亜寒帯気候中央部にかけて帯状に広く留鳥として分布する。国内では北海道、南千島に亜種エゾフクロウ、本州北部に亜種フクロウ、本州北・中部に亜種モミヤマフクロウ、本州中・南西部、淡路島、四国、九州、伊豆諸島に亜種キュウシュウフクロウの4亜種が分布するとされる。亜種エゾフクロウ以外は分布域が明確ではなく今後の研究が待たれる。県内では平地から山地まで広域に分布する。

3. 生息環境

平地から山地の、採餌環境を有するかあるいは隣接している、樹洞が出来るような大径木のある森林、社寺林などに生息する。街灯のある公園などでも見られることがある。

4. 生息状況

全県的には大きな変動は見られない。

5. 減少の主要因と脅威

平地部の里山林や社寺林を囲む道路で、轢死個体 (ロードキル) の目撃が増えている (26)。主な餌となるネズミの生息する草地環境の消滅・荒廃 (16) と森林伐採 (11) に伴う営巣環境のバランスの崩れ、生息地の分断化や、森林の施業放棄 (53) による生息環境の減少が脅威である。

6. 保護対策

樹洞のできる大径木のある森林と餌場となる生物多様性豊かな環境を備え持った「生息域内保全」が望まれる。巣箱設置など営巣環境の整備、野鳥写真撮影愛好家による繁殖阻害などの攪乱も予想されることから生息地への立入り規制も有効である。

7. 特記事項

特になし。

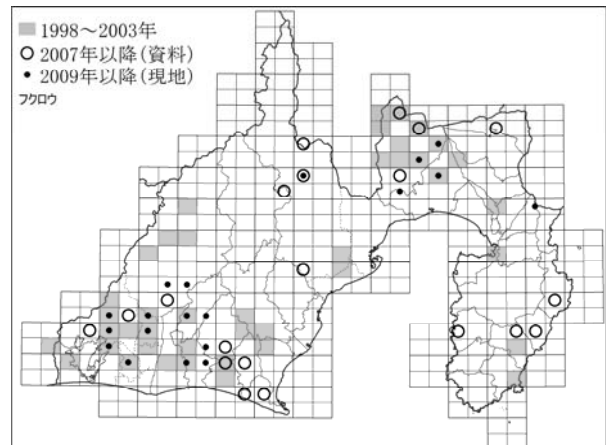
8. 主な文献

基本的な事項については、分類群の解説 (p72) の引用文献に挙げたものを利用した。

(森田剛則)



©2019 S.Watanabe
富士宮市人穴朝霧高原 2012年1月19日 渡邊修治



1. 種の解説

全長約 18 cm。雌雄同色。茶褐色で複雑な模様の羽色をしている。灌木の混じるススキなどの草原やヨシ原に生息し、灌木の低い横枝に止まることが多い。秋の渡りの頃、「キィキィキィ・・・」とモズに似た声で鳴く。昆虫類やクモ類を餌とするが、特にアリを好み、朽ちた樹皮を剥がし、長い舌で巻き取るなどして食う。冬鳥（対象：越冬地）。

2. 分布

国外ではヨーロッパ、北アメリカ、シベリア、オホーツク海沿岸、アムール川流域などで繁殖し、冬はアフリカ中部、インドシナ半島、中国南部などに渡り越冬する。国内では北海道から東北の一部で繁殖し、本州中部以南で越冬する。県内では平地の広い西部地域に広く分布し、他地域での観察例は少ない。

3. 生息環境

海浜、農耕地、河川敷、村落周辺などの草地、ヨシ・オギ群落、疎林などに生息する。

4. 生息状況

秋の渡来時、伊豆・石廊崎のススキ草地の低木で数羽の鳴き合う姿が毎年観察されるが、伊豆地域で越冬する個体数はきわめて少ないものと思われる。静岡県レッドデータブック (2004) と比較するとメッシュ数はほぼ同じであり、西部地域に集中している傾向は変わらない。しかし、記録収集の 10 年間の前半と後半を比べると、後半の生息数はひどく減少している。

5. 減少の主要因と脅威

冬期の生息地となる灌木の混じる草原、河川敷、休耕田のヨシ原などに関して、湿地の埋め立て (15-1)、河川改修 (13) などの影響が大きいと考えられる。そして伊豆を初めとして近年各地で問題となっている風力発電施設、太陽光発電施設による大規模開発など (23) が、大きな脅威と考えられる。

6. 保護対策

数少ない越冬環境となる湿地や草地、農耕地などの保全、大規模風力発電、太陽光発電施設の規制強化の必要性が考えられる。

7. 特記事項

特になし。

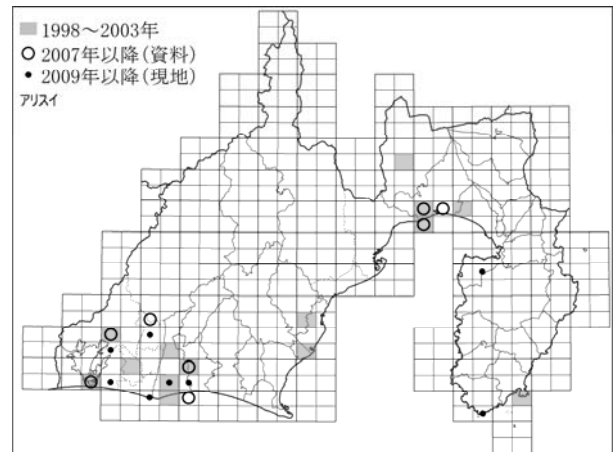
8. 主な文献

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

(酒井洋平)



富士川河口 2007年1月10日 渡邊修治



1. 種の解説

全長約 28 cm。後頭から上面は黒く白い横斑がある。額から顔、喉、胸、脇腹は淡褐色で白っぽい。胸から脇腹にかけて黒くて細い縦斑があり下腹部は赤い。雌雄の違いは、オスは頭頂が赤くメスは黒いことである。枯木中に潜む甲虫類の幼虫やアリなどを捕食する。秋から冬には木の実なども食う。留鳥 (対象: 生息地)。

2. 分布

国外ではヨーロッパ東部、中央アジア、シベリア南部、モンゴル、中国東北地区、朝鮮半島、サハリン、台湾などに生息する。国内では北海道、本州、四国、九州、奄美大島に生息し、北海道にエゾオオアカゲラ、本州北・中部、佐渡にオオアカゲラ、本州中・南西部、隠岐、四国、九州にナミエオオアカゲラ、奄美大島にオーストンオオアカゲラの 4 亜種が分布する。なお、ナミエオオアカゲラについての分布域の詳細は今後の検討が待たれる。県内では東部、中部、西部の山地のブナやミズナラを中心とした自然林に局所的に生息している。

3. 生息環境

巣穴の利用や枯木中に潜む甲虫類の幼虫やアリなどを採餌するため、大径木の枯木、倒木の多い夏緑樹林や針広混交林を好む。

4. 生息状況

東部 (富士裾野)、中部 (井川県民の森周辺)、西部 (水窪野鳥の森・蕎麦粒山周辺) などの自然林に生息する。本種の繁殖期のテリトリーは 200 ha 程といわれ、観察するには偶然の出会いを期待せざるをえず正確な生息状況の把握は難しい。

5. 減少の主要因と脅威

西部の北遠においては、1970 年代までの材木需要 (パルプ・建築資材) による森林伐採で生息域が分断・孤立化し (11)、現在に至っても生息環境の回復には至っていない。現存する自然林では営巣木となっている立枯れ樹木の倒木消滅 (54) が散見され、生息環境の縮小が危惧される。

6. 保護対策

現存する生息地の夏緑樹林、針広混交林の保全が絶対条件である。

7. 特記事項

奄美大島に生息する固有亜種オーストンオオアカゲラは文化財保護法に基づく天然記念物 (昭和 46 年)。

8. 主な文献

日本鳥学会 編 (2012) 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 兵庫, 438 pp.

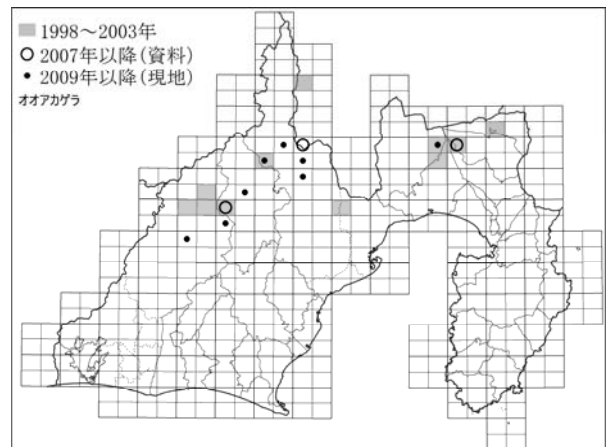
叶内拓哉・阿部直哉・上田秀雄 (2014) 山溪ハンディー図鑑 7 新版日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京, 671 pp.

真木広造・大西敏一・五百澤日丸 (2014) 決定版日本の野鳥 650. 平凡社, 東京, 788 pp.

(森田剛則)



©2019 S.Watanabe
富士市大淵高鉢遊歩道 2011年5月5日 渡邊修治



サンコウチョウ *Terpsiphone atrocaudata* (Eyton, 1839)

カササギヒタキ科 Monarchidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー : なし]

1. 種の解説

オスは全長約 45cm、メスは約 18cm。オスは頭、胸が黒紫色で背は褐色、腹は白い。中央の尾羽は黒色で著しく長く、成熟したものは 30cm を超える。メスは頭と胸は黒色から暗灰色、背と尾は褐色で尾は特に長くはない。雄雌共にさえずる。「ツキ(月)・ヒ(日)・ホシ(星)・ホイホイホイ」と聞きなされて三光鳥の名の由来となっている。最後の「ホイ」音の繰り返しは 3 回が普通であるが、もっと多いものもあり、静岡市清水区の丘陵部でいつも 24 回繰り返す個体があった。餌は主にハエ類、アブ類、トンボ類など飛ぶ昆虫である。夏鳥 (対象: 繁殖地)。

2. 分布

国外では韓国、台湾、フィリピンなどで繁殖し、国内では夏鳥として本州以南に渡来し、インドシナ半島からスマトラなどで越冬するようである。県内では西部から中部にふつうに分布しているが、東部、伊豆はかなり少ない。

3. 生息環境

平地から低山帯のスギ・ヒノキの植林、落葉広葉樹林、針広混交林に生息する。中でも沢が流れている環境を特に好む。

4. 生息状況

平地から低山帯に広く生息する。かつて新東名路線による影響が心配されていた。今回 2016~17 にこの一帯を含めて精査したところ、道路ができた部分はそのどき、全体として安定した生息状況であった。

袋井市に長年複数ペアが生息する場所があった。しかし、環境に大きな変化はないのに、突然 2016 年及び 17 年に各複数回の調査を行ったが、姿が見られなくなった。理由は分からない。一方、御前崎市ではエネルギー革命以後樹木の伐採が行なわれることがなくなった結果、それまでいなかった本種が生息するようになり、今回の調査でも生息を確認している (宮本勝海氏私信)。生息地の標高については、今回の調査で最も低いのは磐田市の 15 m、最も高いのは大井川上流の 800 m であった。

5. 減少の主要因と脅威

生息状況は「安定している」と前項に記したが、新たに心配される事態が生じている。東海地震などとそれに伴う沿岸部の津波予測が出されて以後、沿岸部から丘陵部へ移る企業が増えている。例えば、その 1 社の移転先には 1 メッシュ内に 10 羽以上と県内で最も生息密度の高い場所があり、さらに同メッシュ内には地方自治体の清掃工場の計画も進められている。このような大規模工場などの移転・新設に伴い、本種の好適生息地が造成されて消滅する事態 (23、24) が各地で生じていることは脅威である。

6. 保護対策

サンコウチョウが多く生息するような環境はミゾゴイやヤイロチョウなどの生息適地でもある。県及び地方自治体の環境影響評価審査会などが適切に機能することが望まれる。

7. 特記事項

1964 年に静岡県の鳥に指定されている。

8. 主な文献

基本的な事項については、分類群の解説 (p72) の引用文献に挙げたものを利用した。

(北川捷康)



©2019 H.Nakamura
菊川市西富田 2016年6月2日 中村裕志

